インモラル百合スカ小説

かうっぽのワタしをあいして

1/3

岩咲魔じっく

インモラル百合スカ小説

カラっポのワタしをあいシて

1 / 3

岩咲魔じっく

目　次

登場人物紹介　3
ソノ1　見られてしまったおもらし　5
ソノ2　ワタシはまた繰り返してしまうのでしょうか……　11
ソノ3　ご主人サマ見てっ！　ワタシの汚れた姿！　24
ソノ4　守れませんでした　36
ソノ贈　届けたくて　56

登場人物紹介

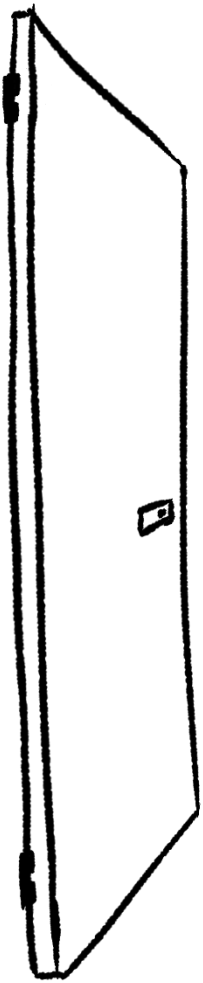
壱ノ宮　照葉（いちのみや　てるは）　十七歳。帰国子女。語り手。

漸来　直美（ささらい　なおみ）　十六歳。

迅林　二三栄（はやばやし　ふみえ）　十七歳。クラスメイト。

西大内　深青（にしおうち　みお）　十七歳。クラスメイト。

龍見沢　留奈（たつみざわ　るな）　??歳。



ソノ１　見られてしまったおもらし

「……は、初めまして。い、壱ノ宮（いちのみや）、照葉（てるは）といいます。カリフォルニアから引っ越して来ました。よ、よろしくお願いします……」

九月に今更やってきた転校生に関心が無いのでしょうか、早くホームルームが終われと言わんばかりのまばらで控えめな拍手が聞こえてきます。

最初はワタシの下に群がってきたクラスメイトの方々も、ワタシが上手くコミュニケーションが取れないニンゲンだと判るとすぐに興味を失っていきました。

休み時間の度にワタシを囲う輪が小さくなり、昼休みを迎えた頃には既にワタシは一人になっていました。自販機で買ったパックのコーヒー風飲料が、やけに冷たく感じます。

ワタシは両親の反対を押し切り、単身で日本に帰国しました。臆病で引っ込み思案なワタシを変えるためにです。だからなんとしてでもワタシの居場所を作らなきゃいけないのです。そう思って隣のコに話しかけてみようとは思うのですが、最初の一歩が踏み出せません。

もたもたしているうちに、五時間目が始まってしまいました。英語の授業は問題文の日本語を理解するのが最も難しいと噂に聞きますが、インターナショナルスクールで覚えた拙い日本語でついていけるでしょうか。

授業が始まってから十分が経った頃、ワタシは腹部に違和感を覚えました。ごろごろ……とお腹がせわしなく動いています。緊張のせいでしょうか。それともさっきの飲み物でお腹が冷えたのでしょうか。どちらでもいいことです。ワタシはただ早くこの時間が過ぎ去ることを願いました。

二十分が経ちました。締め付けるような猛烈な痛みがワタシを襲います。

ギュルルル……

お腹が悲鳴を上げています。苦しい。出したい。

でも、ワタシは手を挙げて排泄の宣言をすることができません。周りの目が気になるのです。高校生にもなって我慢できないんだ。恥ずかしい。汚らわしい。そう見られると思うと怖くて仕方がないのです。

いや、最もそういう目でワタシを見ているのがワタシ自身なのは明らかでしょう。

お腹を押さえていると次第に波は引いていったので、少し安心しました。

あと五分というところで二度目の波が訪れてしまいました。もうそこまで来ている、と不浄な穴の締め付けが教えてくれます。ワタシは脂汗を流しながら歯を食いしばって一秒に一度しか進まない時計の針を睨みつけました。

ゴポゴポ……

おならが出そうですが、ガスではない物体が共に現れるのは明白でした。手に爪をぐっと食い込ませると、多少は気が紛れました。しかし、それも気休めに過ぎず、徐々にガスが出口へと向かっていきます。

これ以上はおならを出さないと耐えられません。ゆっくりとお尻の穴を緩めていきます。慎重に、慎重に……

ブヂュッ!!

（ひぃっ!!）

生暖かい粘液の感触に、全身がゾワッと震えます。名前を口にすることすら躊躇われる汚物が、ワタシの肌を汚している。その嫌悪感に鳥肌が立ちました。

授業の終わりを告げる鐘が鳴りました。ワタシは力が抜けないようゆっくりと慎重に立ち上がると、人の流れに合わせて平静を装い教室を後にしました。どこか遠い、見つからない所で。ワタシは初めて歩く学び舎を急ぎ足で彷徨いました。

階段を降り、渡り廊下を抜けました。荷物が置かれた教室に帰れる自信はありません。もう教室からかなり離れたところまで来ています。ワタシはスカートの上からお尻を押さえながら、目に入った「御手洗」の文字に吸い込まれていきました。

「きゃあっ!!　何これ!?」

ワタシを待ち受けていたのは絶望でした。

三つある個室のうち、二つは便器から足元のタイルまで汚れ切っていました。そのおぞましさにワタシは震えました。ワタシにはとてもじゃないが座ることはできませんでした。

誰かが失敗したのでしょうか？　いや、ここは学校のトイレです。定期的に掃除されるはずです。なぜ二つとも悲惨なことになっているんだろう……いや、今はそんなことを考えている場合ではありません。

足踏みをしながら残る一つの個室を覗きます。そこには白くて細長い穴の開いた何かが横たわっていました。これが便器とでもいうのでしょうか？　未知なる物体を目の前にして、ワタシの脳内は混乱を極めていました。

この便器らしいモノが一番綺麗です。もうここでするしかありません。でも、どうやって？　出ちゃう！　分かんない！

肛門が熱く痺れます。ワタシの意思に反して勝手に開きはじめました。

（もう我慢できない！　ダメ!!　ああっ!!）

ブビィッ!!　ブリュリュリュリュリュ!!

ワタシはとうとう便器の前で力尽きてしまいた。

ムニュニュニュ!!　ムリムリムリッ!!

お尻が生暖かい感触に包まれて気持ち悪いです。

せめて便器の中に……と思うものの、目の前の穴が本当に便器なのかわかりません。仮に便器だとしても、使い方が見当もつきません。ワタシはただパンツの中に汚泥を垂れ流し続けることしかできませんでした。

ベチョッ!!

パンツに収まりきらなくなった不浄な泥がタイルに落ちました。パンツで濾された不潔な粘液がワタシの太ももや靴下、ローファーの中までを卑しく犯していきます。

ワタシは全身を覆う嫌悪感で急激な吐き気を催しました。

「うぉえっ!!」
たまらず目の前の白い穴に向かって胃の苦しみを吐き出します。
ビチャビチャッ!!
落下した吐瀉物が陶器に跳ね返り、辺りに散らばっていきます。靴下に斑点模様が増えていきます。
気持ち悪い。そう思って排泄すればするほど、口やお尻、脚に靴下、ローファーの中まで、身体中のあらゆる所が更に汚染されていきます。負のループに陥ったワタシは、独り寂れたトイレで茶色く染まっていくのでした。

＊　＊　＊

もうお腹には何も残っていません。全て出し尽くしたことで、吐き気も便意も収まっていました。
目に涙が溢れてきました。
何が「日本に来たら変われる」でしょう。ワタシは何も変わっちゃいません。
弱虫で、授業中に手を挙げる勇気が無い。高校生なのに、トイレまで我慢することができない。洋式トイレに屈んで便座に触れることなく排泄する、とか機転を利かせることもできない。
その結果がこの有様です。
ジブンを変えるには踏み出すしかない。それは正しいのです。しかし、ワタシは踏み出したと思い込んでいただけでした。環境を変えたところで、ワタシはワタシのまま。そんな簡単なことにすら気付けませんでした。
情けなさに、悔しさに、涙が止まりません。こぼれ落ちた涙が吐瀉物と混ざり合います。
「……君、大丈夫？」
突然、背後から声がしました。足音には全く気付きませんでした。
「……だ、大丈夫……じゃないです」
顔が見えないまま、震える身体から声を絞り出して答えます。
「君、転校生だよね」
力なくこくりと頷きます。
「確か帰国子女だって……あーそっか。和式トイレの使い方、分かんなかったんだね。仕方ないよ。大丈夫、私に全部任せて」
その言葉を聞いて、堰を切ったように感情が溢れてきました。
「う、うわあぁぁぁん!!」
顔も知らない同級生の胸に抱きつき、大声を上げて泣いてしまいました。ブレザーの胸部にワタシの吐瀉物が付いても、カノジョは嫌がる素振りを見せずそっとワタシを抱きしめてくれました。
「安心して。大丈夫。大丈夫」
体力も精神力も尽きた私は、柔らかなカノジョの胸の中で意識を失っていきました。

＊　＊　＊

洗濯機がぐわぁん、ぐわぁん、と回っている音を聞いていると、なんだか落ち着きます。音に合わせて、ゆったりとした時の流れに合わせて、自然と身体がゆらゆら揺れていました。

「あ、起きた？」

さっきのカノジョに顔を覗き込まれます。顔が近すぎて焦ってしまいます。

どうやらワタシはカノジョにあの窮地を助けてもらい、汚した服の洗濯までしてもらっているみたいです。

身体中にまとわりついていた汚物はサッパリ綺麗に無くなり、ラフなスウェットに着替えさせてもらっていました。ワタシ以外の匂いがしてなんだか落ち着きません。

「勝手に連れ込んで色々しちゃってごめんね。楽になったらお茶しようよ」

そう言ってカノジョは部屋の真ん中に置かれた小さな正方形の机の傍に座りました。

辺りを見回します。ワンルームと思わしき部屋は一面ゴミまみれです。カップ麺の容器や空のペットボトルなどが至る所に散らばっています。

のそのそと布団から這い出します。足元のゴミを踏まないよう慎重に歩き、机の前に座りました。カノジョの正面にしか座れるスペースがありませんでした。

上半身は裸にワイシャツ、そして下半身はショーツのみという無防備な姿でした。

何故か部屋の中なのに帽子を被っています。紺色のマリンキャップがカノジョの左目を隠しており、ミステリアスな雰囲気を醸し出しています。

「私は漸来直美。君と同じクラスだよ。よろしくね。君は確か、壱ノ宮……」

「照葉です」

「可愛い名前だね。私は好きだな。照葉って呼んでいい？」

今までブスだの幽霊だの言われてきたワタシは、生まれて初めて言われた言葉に驚きを隠せません。

「そ、そそそ、そんな……！　かわいいだなんて……」

「名前だけじゃない。そのウェーブがかかった金色の髪も、とっても素敵だよ。……ってこれじゃあナンパしてるみたいだ」

「やめてください！　そんなわけないじゃないですか！　からかわないでください！」

「ごめん、そんなつもりじゃ……」

言いすぎちゃいました。ワタシっていつもこう。他人との距離感が掴めず、近づきすぎるか拒絶して閉じこもってしまうか。こんなだからワタシの周りから誰もいなくなってしまうのです。

「こちらこそ、ごめんなさい……」

気まずい沈黙が流れます。ワタシのせいです。

「そうだ、今日のことなんだけど……あ、思い出したくなかったら言ってね」

「ううん、大丈夫です……」

漸来さんが紙コップにコーラを注ぎます。どうぞ、とワタシに差し出しました。漸来さんは別のコップにもう一杯注いで一気飲みしていました。

「照葉が気を失ってから保健室に連れていこうと思ったけど、保健室に行くまで人通りの多い廊下を通らなきゃいけないからさ。あんまり見られたくないでしょ？　管理棟の裏にフェンスが破れている所があって、そこから照葉を背負って抜け出してきたんだ」

吐瀉物と排泄物に塗れたワタシを背負って……すごい迷惑を掛けてしまったようです。

「ワタシ汚かったですよね、ごめんなさい……」

「ううん、大丈夫。気にしないよ。それでさ、私の住んでるアパート、学校のすぐ側なんだ。だから照葉を連れ込んで、シャワーとか着替えをさせてもらった。勝手に裸にしちゃってごめんね」

「謝らないで。ワタシのためにそこまでしてくれて、あ、あ……」

「……？」

ありがとう。その一言が言えない弱虫なワタシのせいで、漸来さんを困らせてしまいました。

「まぁ、ブレザーとかスカート、洗濯してるからさ。終わるまでゆっくりしていってよ」

そう言って漸来さんは机から離れました。

トモダチの家に遊びに行く経験の無かったワタシには、こういうとき何をして過ごせばいいかわかりません。

ワタシのスマホは……ありました、机の上です。

スマホが手に入ったところでやることは何もありません。一ミリも動かない待ち受け画面をただただ見つめるだけです。

漸来さんはというと、部屋の隅にあるディスプレイの置かれたデスクでタブレットと戯れていました。

暇を持て余したワタシは改めて部屋を見渡します。二つある机の周り以外は足の踏み場がありません。

コーラのペットボトルとエナジードリンクの空き缶が至る所に散らばっています。その中に、よく見たらビールやチューハイの缶が混じっています。誰かが飲みに来るのでしょうか、それとも……いえ、疑うなんて失礼ですね。

普段自炊はしないのでしょうか、シンクにはカップ麺やコンビニ弁当の容器が積み上がっていて、食器や調理器具は全然見当たりません。

窓際には、大きなカゴに入り切らなかった服がたんまりと溢れています。チラリと見えた下着から目を逸らします。

「漸来さんって、一人暮らしなんですか？」

「そうだよ。高校入ってからずっと」

「自炊とかは……してなさそうですね」

「めんどくさくてね。洗濯もめんどくさくて全自動の洗濯機買ったんだ。高かったけどね、凄いよ、最近の洗濯機は。洗濯物干さなくて良くなったもん」

どうやら極度のめんどくさがりのようです。

「漸来さんっ」
「ん、どうした？」
「今日のお礼に、この部屋片付けさせてください！　というかご飯も作らせてください！　こんな食生活続けてたら、漸来さん倒れちゃいます！」
漸来さんの健康に強い不安を感じたワタシは、思い切った提案をしてみました。どうせ距離を縮めるなら一気に攻めてみます。
「えっ、いいってそこまでしてくれなくても。気持ちだけ貰っとくから」
「ワタシがしたいんです！　本当に、漸来さんに助けてもらって、本当に……誰かにワタシを見てもらえることが、ワタシのために何かしてくれることが。それに――」
――こんなワタシを受け入れてくれたことが、何より嬉しくて。
「……それに？」
「……いや、なんでも。とにかく、この部屋はダメです！　ニンゲンの住む場所じゃないですよ！」
あと、汚すぎてこのままじゃワタシの精神が持ちません。
「照葉、厳しいなぁ……この部屋に住んでる私、人間じゃなかったのか」
「いっ、いやそこまでは……」
「はは、冗談だよ。でも、照葉も自分の家のことだってあるし」
「ワタシも一人暮らしなんです。だから大丈夫です」
「そこまで言ってくれるんなら、お願いしようかな。あぁ、現役JKの美少女メイド通い妻なんて、まさに夢のようだなぁ～！」
「言い方がいかがわしいですよ～！」
こうしてワタシたちの不思議な関係が始まりました。
ワタシは期待に満ち溢れていました。転校先でできた人生で初めてのトモダチとの生活に。そして、ようやく一歩を踏み出すことができたワタシのこれからに。

ソノ1　見られてしまったおもらし

5

見られてしまったおもらし

「……は、初めまして。い、壱ノ宮（いちのみや）、照葉（てるは）といいます。カリフォルニアから引っ越して来ました。よ、よろしくお願いします……」

九月に今更やってきた転校生に関心が無いのでしょうか、早くホームルームが終われと言わんばかりのまばらで控えめな拍手が聞こえてきます。

最初はワタシの下に群がってきたクラスメイトの方々も、ワタシが上手くコミュニケーションが取れないニンゲンだと判るとすぐに興味を失っていきました。

休み時間の度にワタシを囲う輪が小さくなり、昼休みを迎えた頃には既にワタシは一人になっていました。自販機で買ったパックのコーヒー風飲料が、やけに冷たく感じます。

ワタシは両親の反対を押し切り、単身で日本に帰国しました。臆病で引っ込み思案なワタシを変えるためにです。だからなんとしてでもワタシの居場所を作らなきゃいけないのです。そう思って隣のコに話しかけてみようとは思うのですが、最初の一歩が踏み出せません。

もたもたしているうちに、五時間目が始まってしまいました。英語の授業は問題文の日本語を理解するのが最も難しいと噂に聞きますが、インターナショナルスクールで覚えた拙い日本語でついていけるでしょうか。

授業が始まってから十分が経った頃、ワタシは腹部に違和感を覚えました。ごろごろ……とお腹がせわしなく動いています。緊張のせいでしょうか。それともさっきの飲み物でお腹が冷えたのでしょうか。どちらでもいいことです。ワタシはただ早くこの時間が過ぎ去ることを願いました。

二十分が経ちました。締め付けるような猛烈な痛みがワタシを襲います。

ギュルルル……

お腹が悲鳴を上げています。苦しい。出したい。

でも、ワタシは手を挙げて排泄の宣言をすることができません。周りの目が気になるのです。高校生にもなって我慢できないんだ。恥ずかしい。汚らわしい。そう見られると思うと怖くて仕方がないのです。

いや、最もそういう目でワタシを見ているのがワタシ自身なのは明らかでしょう。

お腹を押さえていると次第に波は引いていったので、少し安心しました。

あと五分というところで二度目の波が訪れてしまいました。もうそこまで来ている、と不浄な穴の締め付けが教えてくれます。ワタシは脂汗を流しながら歯を食いしばって一秒に一度しか進まない時計の針を睨みつけました。

ゴポゴポ……

おならが出そうですが、ガスではない物体が共に現れるのは明白でした。手に爪をぐっと食い込ませると、多少は気が紛れました。しかし、それも気休めに過ぎず、徐々にガスが出口へと向かっていきます。

これ以上はおならを出さないと耐えられません。ゆっくりとお尻の穴を緩めていきます。慎重に、慎重に……

ブヂュッ!!

（ひぃっ!!）

生暖かい粘液の感触に、全身がゾワッと震えます。名前を口にすることすら躊躇われる汚物が、ワタシの肌を汚している。その嫌悪感に鳥肌が立ちました。

授業の終わりを告げる鐘が鳴りました。ワタシは力が抜けないようゆっくりと慎重に立ち上がると、人の流れに合わせて平静を装い教室を後にしました。どこか遠い、見つからない所で。ワタシは初めて歩く学び舎を急ぎ足で彷徨いました。

階段を降り、渡り廊下を抜けました。荷物が置かれた教室に帰れる自信はありません。もう教室からかなり離れたところまで来ています。ワタシはスカートの上からお尻を押さえながら、目に入った「御手洗」の文字に吸い込まれていきました。

「きゃあっ!!　何これ!?」

ワタシを待ち受けていたのは絶望でした。

三つある個室のうち、二つは便器から足元のタイルまで汚れ切っていました。そのおぞましさにワタシは震えました。ワタシにはとてもじゃないが座ることはできませんでした。

誰かが失敗したのでしょうか？　いや、ここは学校のトイレです。定期的に掃除されるはずです。なぜ二つとも悲惨なことになっているんだろう……いや、今はそんなことを考えている場合ではありません。

足踏みをしながら残る一つの個室を覗きます。そこには白くて細長い穴の開いた何かが横たわっていました。これが便器とでもいうのでしょうか？　未知なる物体を目の前にして、ワタシの脳内は混乱を極めていました。

この便器らしいモノが一番綺麗です。もうここでするしかありません。でも、どうやって？　出ちゃう！　分かんない！

肛門が熱く痺れます。ワタシの意思に反して勝手に開きはじめました。

（もう我慢できない！　ダメ!!　ああっ!!）

ブビィッ!!　ブリュリュリュリュリュ!!

ワタシはとうとう便器の前で力尽きてしまいた。

ムニュニュニュ!!　ムリムリムリッ!!

お尻が生暖かい感触に包まれて気持ち悪いです。

せめて便器の中に……と思うものの、目の前の穴が本当に便器なのかわかりません。仮に便器だとしても、使い方が見当もつきません。ワタシはただパンツの中に汚泥を垂れ流し続けることしかできませんでした。

ベチョッ!!

パンツに収まりきらなくなった不浄な泥がタイルに落ちました。パンツで濾された不潔な粘液がワタシの太ももや靴下、ローファーの中までを卑しく犯していきます。

ワタシは全身を覆う嫌悪感で急激な吐き気を催しました。

「うぉえっ!!」
たまらず目の前の白い穴に向かって胃の苦しみを吐き出します。
ビチャビチャッ!!
落下した吐瀉物が陶器に跳ね返り、辺りに散らばっていきます。靴下に斑点模様が増えていきます。
気持ち悪い。そう思って排泄すればするほど、口やお尻、脚に靴下、ローファーの中まで、身体中のあらゆる所が更に汚染されていきます。負のループに陥ったワタシは、独り寂れたトイレで茶色く染まっていくのでした。

＊　＊　＊

もうお腹には何も残っていません。全て出し尽くしたことで、吐き気も便意も収まっていました。
目に涙が溢れてきました。
何が「日本に来たら変われる」でしょう。ワタシは何も変わっちゃいません。
弱虫で、授業中に手を挙げる勇気が無い。高校生なのに、トイレまで我慢することができない。洋式トイレに屈んで便座に触れることなく排泄する、とか機転を利かせることもできない。
その結果がこの有様です。
ジブンを変えるには踏み出すしかない。それは正しいのです。しかし、ワタシは踏み出したと思い込んでいただけでした。環境を変えたところで、ワタシはワタシのまま。そんな簡単なことにすら気付けませんでした。
情けなさに、悔しさに、涙が止まりません。こぼれ落ちた涙が吐瀉物と混ざり合います。
「……君、大丈夫？」
突然、背後から声がしました。足音には全く気付きませんでした。
「……だ、大丈夫……じゃないです」
顔が見えないまま、震える身体から声を絞り出して答えます。
「君、転校生だよね」
力なくこくりと頷きます。
「確か帰国子女だって……あーそっか。和式トイレの使い方、分かんなかったんだね。仕方ないよ。大丈夫、私に全部任せて」
その言葉を聞いて、堰を切ったように感情が溢れてきました。
「う、うわあぁぁぁん!!」
顔も知らない同級生の胸に抱きつき、大声を上げて泣いてしまいました。ブレザーの胸部にワタシの吐瀉物が付いても、カノジョは嫌がる素振りを見せずそっとワタシを抱きしめてくれました。
「安心して。大丈夫。大丈夫」
体力も精神力も尽きた私は、柔らかなカノジョの胸の中で意識を失っていきました。

＊　＊　＊

洗濯機がぐわぁん、ぐわぁん、と回っている音を聞いていると、なんだか落ち着きます。音に合わせて、ゆったりとした時の流れに合わせて、自然と身体がゆらゆら揺れていました。

「あ、起きた？」

さっきのカノジョに顔を覗き込まれます。顔が近すぎて焦ってしまいます。

どうやらワタシはカノジョにあの窮地を助けてもらい、汚した服の洗濯までしてもらっているみたいです。

身体中にまとわりついていた汚物はサッパリ綺麗に無くなり、ラフなスウェットに着替えさせてもらっていました。ワタシ以外の匂いがしてなんだか落ち着きません。

「勝手に連れ込んで色々しちゃってごめんね。楽になったらお茶しようよ」

そう言ってカノジョは部屋の真ん中に置かれた小さな正方形の机の傍に座りました。

辺りを見回します。ワンルームと思わしき部屋は一面ゴミまみれです。カップ麺の容器や空のペットボトルなどが至る所に散らばっています。

のそのそと布団から這い出します。足元のゴミを踏まないよう慎重に歩き、机の前に座りました。カノジョの正面にしか座れるスペースがありませんでした。

上半身は裸にワイシャツ、そして下半身はショーツのみという無防備な姿でした。

何故か部屋の中なのに帽子を被っています。紺色のマリンキャップがカノジョの左目を隠しており、ミステリアスな雰囲気を醸し出しています。

「私は漸来直美（さざらいなおみ）。君と同じクラスだよ。よろしくね。君は確か、壱ノ宮（いちのみや）……」

「照葉（てるは）です」

「可愛い名前だね。私は好きだな。照葉（てるは）って呼んでいい？」

今までブスだの幽霊だの言われてきたワタシは、生まれて初めて言われた言葉に驚きを隠せません。

「そ、そそそ、そんな……！　かわいいだなんて……」

「名前だけじゃない。そのウェーブがかかった金色の髪も、とっても素敵だよ。……ってこれじゃあナンパしてるみたいだ」

「やめてください！　そんなわけないじゃないですか！　からかわないでください！」

「ごめん、そんなつもりじゃ……」

言いすぎちゃいました。ワタシっていつもこう。他人との距離感が掴めず、近づきすぎるか拒絶して閉じこもってしまうか。こんなだからワタシの周りから誰もいなくなってしまうのです。

「こちらこそ、ごめんなさい……」

気まずい沈黙が流れます。ワタシのせいです。

「そうだ、今日のことなんだけど……あ、思い出したくなかったら言ってね」

「ううん、大丈夫です……」

見られてしまったおもらし

漸来さんが紙コップにコーラを注ぎます。どうぞ、とワタシに差し出しました。漸来さんは別のコップにもう一杯注いで一気飲みしていました。

「照葉が気を失ってから保健室に連れていこうと思ったけど、保健室に行くまで人通りの多い廊下を通らなきゃいけないからさ。あんまり見られたくないでしょ？　管理棟の裏にフェンスが破れている所があって、そこから照葉を背負って抜け出してきたんだ」

吐瀉物と排泄物に塗れたワタシを背負って……すごい迷惑を掛けてしまったようです。

「ワタシ汚かったですよね、ごめんなさい……」

「ううん、大丈夫。気にしないよ。それでさ、私の住んでるアパート、学校のすぐ側なんだ。だから照葉を連れ込んで、シャワーとか着替えをさせてもらった。勝手に裸にしちゃってごめんね」

「謝らないで。ワタシのためにそこまでしてくれて、あ、あ……」

「……？」

ありがとう。その一言が言えない弱虫なワタシのせいで、漸来さんを困らせてしまいました。

「まぁ、ブレザーとかスカート、洗濯してるからさ。終わるまでゆっくりしていってよ」

そう言って漸来さんは机から離れました。

トモダチの家に遊びに行く経験の無かったワタシには、こういうとき何をして過ごせばいいかわかりません。

ワタシのスマホは……ありました、机の上です。

スマホが手に入ったところでやることは何もありません。一ミリも動かない待ち受け画面をただただ見つめるだけです。

漸来さんはというと、部屋の隅にあるディスプレイの置かれたデスクでタブレットと戯れていました。

暇を持て余したワタシは改めて部屋を見渡します。二つある机の周り以外は足の踏み場がありません。

コーラのペットボトルとエナジードリンクの空き缶が至る所に散らばっています。その中に、よく見たらビールやチューハイの缶が混じっています。誰かが飲みに来るのでしょうか、それとも……いえ、疑うなんて失礼ですね。

普段自炊はしないのでしょうか、シンクにはカップ麺やコンビニ弁当の容器が積み上がっていて、食器や調理器具は全然見当たりません。

窓際には、大きなカゴに入り切らなかった服がたんまりと溢れています。チラリと見えた下着から目を逸らします。

「漸来さんって、一人暮らしなんですか？」

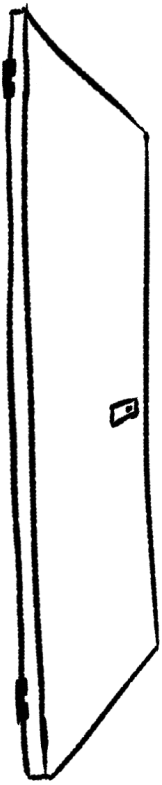
「そうだよ。高校入ってからずっと」

「自炊とかは……してなさそうですね」

「めんどくさくてね。洗濯もめんどくさくて全自動の洗濯機買ったんだ。高かったけどね、凄いよ、最近の洗濯機は。洗濯物干さなくて良くなったもん」

どうやら極度のめんどくさがりのようです。

「漸来さんっ」
「ん、どうした？」
「今日のお礼に、この部屋片付けさせてください！　というかご飯も作らせてください！　こんな食生活続けてたら、漸来さん倒れちゃいます！」
　漸来さんの健康に強い不安を感じたワタシは、思い切った提案をしてみました。どうせ距離を縮めるなら一気に攻めてみます。
「えっ、いいってそこまでしてくれなくても。気持ちだけ貰っとくから」
「ワタシがしたいんです！　本当に、漸来さんに助けてもらって、本当に……誰かにワタシを見てもらえることが、ワタシのために何かしてくれることが。それに――」
　――こんなワタシを受け入れてくれたことが、何より嬉しくて。
「……それに？」
「……いや、なんでも。とにかく、この部屋はダメです！　ニンゲンの住む場所じゃないですよ！」
　あと、汚すぎてこのままじゃワタシの精神が持ちません。
「照葉、厳しいなぁ……この部屋に住んでる私、人間じゃなかったのか」
「いっ、いやそこまでは……」
「ははっ、冗談だよ。でも、照葉も自分の家のことだってあるし」
「ワタシも一人暮らしなんです。だから大丈夫です」
「そこまで言ってくれるんなら、お願いしようかな。あぁ、現役JKの美少女メイド通い妻なんて、まさに夢のようだなぁ～！」
「言い方がいかがわしいですよ～！」
　こうしてワタシたちの不思議な関係が始まりました。
　ワタシは期待に満ち溢れていました。転校先でできた人生で初めてのトモダチとの生活に。そして、ようやく一歩を踏み出すことができたワタシのこれからに。



ソノ1　見られてしまったおもらし

5

見られてしまったおもらし

「……は、初めまして。い、壱ノ宮（いちのみや）、照葉（てるは）といいます。カリフォルニアから引っ越して来ました。よ、よろしくお願いします……」

九月に今更やってきた転校生に関心が無いのでしょうか、早くホームルームが終われと言わんばかりのまばらで控えめな拍手が聞こえてきます。

最初はワタシの下に群がってきたクラスメイトの方々も、ワタシが上手くコミュニケーションが取れないニンゲンだと判るとすぐに興味を失っていきました。

休み時間の度にワタシを囲う輪が小さくなり、昼休みを迎えた頃には既にワタシは一人になっていました。自販機で買ったパックのコーヒー風飲料が、やけに冷たく感じます。

ワタシは両親の反対を押し切り、単身で日本に帰国しました。臆病で引っ込み思案なワタシを変えるためにです。だからなんとしてでもワタシの居場所を作らなきゃいけないのです。そう思って隣のコに話しかけてみようとは思うのですが、最初の一歩が踏み出せません。

もたもたしているうちに、五時間目が始まってしまいました。英語の授業は問題文の日本語を理解するのが最も難しいと噂に聞きますが、インターナショナルスクールで覚えた拙い日本語でついていけるでしょうか。

6

見られてしまったおもらし

授業が始まってから十分が経った頃、ワタシは腹部に違和感を覚えました。ごろごろ……とお腹がせわしなく動いています。緊張のせいでしょうか。それともさっきの飲み物でお腹が冷えたのでしょうか。どちらでもいいことです。ワタシはただ早くこの時間が過ぎ去ることを願いました。

二十分が経ちました。締め付けるような猛烈な痛みがワタシを襲います。

ギュルルル……

お腹が悲鳴を上げています。苦しい。出したい。

でも、ワタシは手を挙げて排泄の宣言をすることができません。周りの目が気になるのです。高校生にもなって我慢できないんだ。恥ずかしい。汚らわしい。そう見られると思うと怖くて仕方がないのです。

いや、最もそういう目でワタシを見ているのがワタシ自身なのは明らかでしょう。

お腹を押さえていると次第に波は引いていったので、少し安心しました。

あと五分というところで二度目の波が訪れてしまいました。もうそこまで来ている、と不浄な穴の締め付けが教えてくれます。ワタシは脂汗を流しながら歯を食いしばって一秒に一度しか進まない時計の針を睨みつけました。

7

見られてしまったおもらし

ゴポゴポ……

おならが出そうですが、ガスではない物体が共に現れるのは明白でした。手に爪をぐっと食い込ませると、多少は気が紛れました。しかし、それも気休めに過ぎず、徐々にガスが出口へと向かっていきます。

これ以上はおならを出さないと耐えられません。ゆっくりとお尻の穴を緩めていきます。慎重に、慎重に……

ブヂュッ!!

（ひぃっ!!）

生暖かい粘液の感触に、全身がゾワッと震えます。名前を口にすることすら躊躇われる汚物が、ワタシの肌を汚している。その嫌悪感に鳥肌が立ちました。

授業の終わりを告げる鐘が鳴りました。ワタシは力が抜けないようゆっくりと慎重に立ち上がると、人の流れに合わせて平静を装い教室を後にしました。どこか遠い、見つからない所で。ワタシは初めて歩く学び舎を急ぎ足で彷徨いました。

階段を降り、渡り廊下を抜けました。荷物が置かれた教室に帰れる自信はありません。もう教室からかなり離れたところまで来ています。ワタシはスカートの上からお尻を押さ

えながら、目に入った「御手洗」の文字に吸い込まれていきました。

「きゃあっ!!　何これ!?」

ワタシを待ち受けていたのは絶望でした。

三つある個室のうち、二つは便器から足元のタイルまで汚れ切っていました。そのおぞましさにワタシは震えました。ワタシにはとてもじゃないが座ることはできませんでした。

誰かが失敗したのでしょうか？　いや、ここは学校のトイレです。定期的に掃除されるはずです。なぜ二つとも悲惨なことになっているんだろう……いや、今はそんなことを考えている場合ではありません。

足踏みをしながら残る一つの個室を覗きます。そこには白くて細長い穴の開いた何かが横たわっていました。これが便器とでもいうのでしょうか？　未知なる物体を目の前にして、ワタシの脳内は混乱を極めていました。

この便器らしいモノが一番綺麗です。もうここでするしかありません。でも、どうやって？　出ちゃう！　分かんない！

肛門が熱く痺れます。ワタシの意思に反して勝手に開きはじめました。

（もう我慢できない！　ダメ!!　ああっ!!）

見られてしまったおもらし

ブビィッ!!　ブリュリュリュリュリュ!!

ワタシはとうとう便器の前で力尽きてしまいた。

ムニュニュニュ!!　ムリムリムリッ!!

お尻が生暖かい感触に包まれて気持ち悪いです。

せめて便器の中に……と思うものの、目の前の穴が本当に便器なのかわかりません。仮に便器だとしても、使い方が見当もつきません。ワタシはただパンツの中に汚泥を垂れ流し続けることしかできませんでした。

ベチョッ!!

パンツに収まりきらなくなった不浄な泥がタイルに落ちました。パンツで濾された不潔な粘液がワタシの太ももや靴下、ローファーの中までを卑しく犯していきます。

ワタシは全身を覆う嫌悪感で急激な吐き気を催しました。

「ぅぉえっ!!」

たまらず目の前の白い穴に向かって胃の苦しみを吐き出します。

ビチャビチャッ!!

落下した吐瀉物が陶器に跳ね返り、辺りに散らばっていきます。靴下に斑点模様が増え

ていきます。

気持ち悪い。そう思って排泄すればするほど、口やお尻、脚に靴下、ローファーの中まで、身体中のあらゆる所が更に汚染されていきます。負のループに陥ったワタシは、独り寂れたトイレで茶色く染まっていくのでした。

＊　＊　＊

もうお腹には何も残っていません。全て出し尽くしたことで、吐き気も便意も収まっていました。

目に涙が溢れてきました。

何が「日本に来たら変われる」でしょう。ワタシは何も変わっちゃいません。

弱虫で、授業中に手を挙げる勇気が無い。高校生なのに、トイレまで我慢することができない。洋式トイレに屈んで便座に触れることなく排泄する、とか機転を利かせることもできない。

その結果がこの有様です。

見られてしまったおもらし

ジブンを変えるには踏み出すしかない。それは正しいのです。しかし、ワタシは踏み出したと思い込んでいただけでした。環境を変えたところで、ワタシはワタシのまま。そんな簡単なことにすら気付けませんでした。

情けなさに、悔しさに、涙が止まりません。こぼれ落ちた涙が吐瀉物と混ざり合います。

「……君、大丈夫？」

突然、背後から声がしました。足音には全く気付きませんでした。

「……だ、大丈夫……じゃないです」

顔が見えないまま、震える身体から声を絞り出して答えます。

「君、転校生だよね」

力なくこくりと頷きます。

「確か帰国子女だって……あーそっか。和式トイレの使い方、分かんなかったんだね。仕方ないよ。大丈夫、私に全部任せて」

その言葉を聞いて、堰を切ったように感情が溢れてきました。

「う、うわあぁぁぁん!!」

顔も知らない同級生の胸に抱きつき、大声を上げて泣いてしまいました。ブレザーの胸

部にワタシの吐瀉物が付いても、カノジョは嫌がる素振りを見せずそっとワタシを抱きしめてくれました。
「安心して。大丈夫。大丈夫」
体力も精神力も尽きた私は、柔らかなカノジョの胸の中で意識を失っていきました。

＊　＊　＊

洗濯機がぐわぁん、ぐわぁん、と回っている音を聞いていると、なんだか落ち着きます。音に合わせて、ゆったりとした時の流れに合わせて、自然と身体がゆらゆら揺れていました。
「あ、起きた？」
さっきのカノジョに顔を覗き込まれます。顔が近すぎて焦ってしまいます。
どうやらワタシはカノジョにあの窮地を助けてもらい、汚した服の洗濯までしてもらっているみたいです。
身体中にまとわりついていた汚物はサッパリ綺麗に無くなり、ラフなスウェットに着替

見られてしまったおもらし

えさせてもらっていました。ワタシ以外の匂いがしてなんだか落ち着きません。

「勝手に連れ込んで色々しちゃってごめんね。楽になったらお茶しようよ」

そう言ってカノジョは部屋の真ん中に置かれた小さな正方形の机の傍に座りました。

辺りを見回します。ワンルームと思わしき部屋は一面ゴミまみれです。カップ麺の容器や空のペットボトルなどが至る所に散らばっています。

のそのそと布団から這い出します。足元のゴミを踏まないよう慎重に歩き、机の前に座りました。カノジョの正面にしか座れるスペースがありませんでした。

上半身は裸にワイシャツ、そして下半身はショーツのみという無防備な姿でした。

何故か部屋の中なのに帽子を被っています。紺色のマリンキャップがカノジョの左目を隠しており、ミステリアスな雰囲気を醸し出しています。

「私は 漸来直美(さざらいなおみ)。君と同じクラスだよ。よろしくね。君は確か、壱ノ宮(いちのみや)……」

「照葉(てるは) です」

「可愛い名前だね。私は好きだな。照葉(てるは)って呼んでいい？」

今までブスだの幽霊だの言われてきたワタシは、生まれて初めて言われた言葉に驚きを隠せません。

見られてしまったおもらし

「そ、そそそ、そんな……！　かわいいだなんて……」

「名前だけじゃない。そのウェーブがかかった金色の髪も、とっても素敵だよ。……ってこれじゃあナンパしてるみたいだ」

「やめてください！　そんなわけないじゃないですか！　からかわないでください！」

「ごめん、そんなつもりじゃ……」

言いすぎちゃいました。ワタシっていつもこう。他人との距離感が掴めず、近づきすぎるか拒絶して閉じこもってしまうか。こんなだからワタシの周りから誰もいなくなってしまうのです。

「こちらこそ、ごめんなさい……」

気まずい沈黙が流れます。ワタシのせいです。

「そうだ、今日のことなんだけど……あ、思い出したくなかったら言ってね」

「ううん、大丈夫です……」

漸来さんが紙コップにコーラを注ぎます。どうぞ、とワタシに差し出しました。漸来さんは別のコップにもう一杯注いで一気飲みしていました。

「照葉が気を失ってから保健室に連れていこうと思ったけど、保健室に行くまで人通り

見られてしまったおもらし

の多い廊下を通らなきゃいけないからさ。あんまり見られたくないでしょ？　管理棟の裏にフェンスが破れている所があって、そこから照葉を背負って抜け出してきたんだ」

吐瀉物と排泄物に塗れたワタシを背負って……すごい迷惑を掛けてしまったようです。

「ワタシ汚かったですよね、ごめんなさい……」

「ううん、大丈夫。気にしないよ。それでさ、私の住んでるアパート、学校のすぐ側なんだ。だから照葉を連れ込んで、シャワーとか着替えをさせてもらった。勝手に裸にしちゃってごめんね」

「謝らないで。ワタシのためにそこまでしてくれて、あ、あ……」

「……？」

ありがとう。その一言が言えない弱虫なワタシのせいで、漸来さんを困らせてしまいました。

「まぁ、ブレザーとかスカート、洗濯してるからさ。終わるまでゆっくりしていってよ」

そう言って漸来さんは机から離れました。

トモダチの家に遊びに行く経験の無かったワタシには、こういうとき何をして過ごせばいいかわかりません。

見られてしまったおもらし

ワタシのスマホは……ありました、机の上です。

スマホが手に入ったところでやることは何もありません。一ミリも動かない待ち受け画面をただただ見つめるだけです。

漸来(ささらい)さんはというと、部屋の隅にあるディスプレイの置かれたデスクでタブレットと戯れていました。

暇を持て余したワタシは改めて部屋を見渡します。二つある机の周り以外は足の踏み場がありません。

コーラのペットボトルとエナジードリンクの空き缶が至る所に散らばっています。その中に、よく見たらビールやチューハイの缶が混じっています。誰かが飲みに来るのでしょうか、それとも……いえ、疑うなんて失礼ですね。

普段自炊はしないのでしょうか、シンクにはカップ麺やコンビニ弁当の容器が積み上がっていて、食器や調理器具は全然見当たりません。

窓際には、大きなカゴに入り切らなかった服がたんまりと溢れています。チラリと見えた下着から目を逸らします。

「漸来(ささらい)さんって、一人暮らしなんですか？」

「そうだよ。高校入ってからずっと」
「自炊とかは……してなさそうですね」
「めんどくさくてね。洗濯もめんどくさくて全自動の洗濯機買ったんだ。高かったけどね、凄いよ、最近の洗濯機は。洗濯物干さなくて良くなったもん」
どうやら極度のめんどくさがりのようです。
「漸来さんっ」
「ん、どうした？」
「今日のお礼に、この部屋片付けさせてください！　というかご飯も作らせてください！　こんな食生活続けてたら、漸来さん倒れちゃいます！」
漸来さんの健康に強い不安を感じたワタシは、思い切った提案をしてみました。どうせ距離を縮めるなら一気に攻めてみます。
「えっ、いいってそこまでしてくれなくても。気持ちだけ貰っとくから」
「ワタシがしたいんです！　本当に、漸来さんに助けてもらって、本当に……誰かにワタシを見てもらえることが、ワタシのために何かしてくれることが。それに――」
――こんなワタシを受け入れてくれたことが、何より嬉しくて。

「……それに？」

「……いや、なんでも。とにかく、この部屋はダメです！　ニンゲンの住む場所じゃないですよ！」

あと、汚すぎてこのままじゃワタシの精神が持ちません。

「照葉（てるは）、厳しいなぁ……この部屋に住んでる私、人間じゃなかったのか」

「いっ、いやそこまでは……」

「はは、冗談だよ。でも、照葉（てるは）も自分の家のことだってあるし」

「ワタシも一人暮らしなんです。だから大丈夫です」

「そこまで言ってくれるんなら、お願いしようかな。あぁ、現役JKの美少女メイド通い妻なんて、まさに夢のようだなぁ～！」

「言い方がいかがわしいですよ～！」

こうしてワタシたちの不思議な関係が始まりました。

ワタシは期待に満ち溢れていました。転校先でできた人生で初めてのトモダチとの生活に。そして、ようやく一歩を踏み出すことができたワタシのこれからに。

ソノ1　見られてしまったおもらし

5

見られてしまったおもらし

「……は、初めまして。い、壱ノ宮（いちのみや）、照葉（てるは）といいます。カリフォルニアから引っ越して来ました。よ、よろしくお願いします……」

九月に今更やってきた転校生に関心が無いのでしょうか、早くホームルームが終われと言わんばかりのまばらで控えめな拍手が聞こえてきます。

最初はワタシの下に群がってきたクラスメイトの方々も、ワタシが上手くコミュニケーションが取れないニンゲンだと判るとすぐに興味を失っていきました。

休み時間の度にワタシを囲う輪が小さくなり、昼休みを迎えた頃には既にワタシは一人になっていました。自販機で買ったパックのコーヒー風飲料が、やけに冷たく感じます。

ワタシは両親の反対を押し切り、単身で日本に帰国しました。臆病で引っ込み思案なワタシを変えるためにです。だからなんとしてでもワタシの居場所を作らなきゃいけないのです。そう思って隣のコに話しかけてみようとは思うのですが、最初の一歩が踏み出せません。

もたもたしているうちに、五時間目が始まってしまいました。英語の授業は問題文の日本語を理解するのが最も難しいと噂に聞きますが、インターナショナルスクールで覚えた拙い日本語でついていけるでしょうか。

6

見られてしまったおもらし

授業が始まってから十分が経った頃、ワタシは腹部に違和感を覚えました。ごろごろ……とお腹がせわしなく動いています。緊張のせいでしょうか。それともさっきの飲み物でお腹が冷えたのでしょうか。どちらでもいいことです。ワタシはただ早くこの時間が過ぎ去ることを願いました。

二十分が経ちました。締め付けるような猛烈な痛みがワタシを襲います。

ギュルルル……

お腹が悲鳴を上げています。苦しい。出したい。

でも、ワタシは手を挙げて排泄の宣言をすることができません。周りの目が気になるのです。高校生にもなって我慢できないんだ。恥ずかしい。汚らわしい。そう見られると思うと怖くて仕方がないのです。

いや、最もそういう目でワタシを見ているのがワタシ自身なのは明らかでしょう。

お腹を押さえていると次第に波は引いていったので、少し安心しました。

あと五分というところで二度目の波が訪れてしまいました。もうそこまで来ている、と不浄な穴の締め付けが教えてくれます。ワタシは脂汗を流しながら歯を食いしばって一秒に一度しか進まない時計の針を睨みつけました。

7

見られてしまったおもらし

ゴポゴポ……

おならが出そうですが、ガスではない物体が共に現れるのは明白でした。手に爪をぐっと食い込ませると、多少は気が紛れました。しかし、それも気休めに過ぎず、徐々にガスが出口へと向かっていきます。

これ以上はおならを出さないと耐えられません。ゆっくりとお尻の穴を緩めていきます。慎重に、慎重に……

ブチュッ!!

（ひぃっ!!）

生暖かい粘液の感触に、全身がゾワッと震えます。名前を口にすることすら躊躇われる汚物が、ワタシの肌を汚している。その嫌悪感に鳥肌が立ちました。

授業の終わりを告げる鐘が鳴りました。ワタシは力が抜けないようゆっくりと慎重に立ち上がると、人の流れに合わせて平静を装い教室を後にしました。どこか遠い、見つからない所で。ワタシは初めて歩く学び舎を急ぎ足で彷徨いました。

階段を降り、渡り廊下を抜けました。荷物が置かれた教室に帰れる自信はありません。もう教室からかなり離れたところまで来ています。ワタシはスカートの上からお尻を押さ

8

見られてしまったおもらし

えながら、目に入った「御手洗」の文字に吸い込まれていきました。

「きゃあっ!!　何これ!?」

ワタシを待ち受けていたのは絶望でした。

三つある個室のうち、二つは便器から足元のタイルまで汚れ切っていました。そのおぞましさにワタシは震えました。ワタシにはとてもじゃないが座ることはできませんでした。

誰かが失敗したのでしょうか？　いや、ここは学校のトイレです。定期的に掃除されるはずです。なぜ二つとも悲惨なことになっているんだろう……いや、今はそんなことを考えている場合ではありません。

足踏みをしながら残る一つの個室を覗きます。そこには白くて細長い穴の開いた何かが横たわっていました。これが便器とでもいうのでしょうか？　未知なる物体を目の前にして、ワタシの脳内は混乱を極めていました。

この便器らしいモノが一番綺麗です。もうここでするしかありません。でも、どうやって？　出ちゃう！　分かんない！

肛門が熱く痺れます。ワタシの意思に反して勝手に開きはじめました。

（もう我慢できない！　ダメ!!　ああっ!!）

9

見られてしまったおもらし

ブビィッ!!　ブリュリュリュリュリュ!!

ワタシはとうとう便器の前で力尽きてしまいた。

ムニュニュニュ!!　ムリムリムリッ!!

お尻が生暖かい感触に包まれて気持ち悪いです。

せめて便器の中に……と思うものの、目の前の穴が本当に便器なのかわかりません。仮に便器だとしても、使い方が見当もつきません。ワタシはただパンツの中に汚泥を垂れ流し続けることしかできませんでした。

ベチョッ!!

パンツに収まりきらなくなった不浄な泥がタイルに落ちました。パンツで濾された不潔な粘液がワタシの太ももや靴下、ローファーの中までを卑しく犯していきます。

ワタシは全身を覆う嫌悪感で急激な吐き気を催しました。

「ぅぉえっ!!」

たまらず目の前の白い穴に向かって胃の苦しみを吐き出します。

ビチャビチャッ!!

落下した吐瀉物が陶器に跳ね返り、辺りに散らばっていきます。靴下に斑点模様が増え

ていきます。

気持ち悪い。そう思って排泄すればするほど、口やお尻、脚に靴下、ローファーの中まで、身体中のあらゆる所が更に汚染されていきます。負のループに陥ったワタシは、独り寂れたトイレで茶色く染まっていくのでした。

＊　＊　＊

もうお腹には何も残っていません。全て出し尽くしたことで、吐き気も便意も収まっていました。

目に涙が溢れてきました。

何が「日本に来たら変われる」でしょう。ワタシは何も変わっちゃいません。

弱虫で、授業中に手を挙げる勇気が無い。高校生なのに、トイレまで我慢することができない。洋式トイレに屈んで便座に触れることなく排泄する、とか機転を利かせることもできない。

その結果がこの有様です。

11

見られてしまったおもらし

ジブンを変えるには踏み出すしかない。それは正しいのです。しかし、ワタシは踏み出したと思い込んでいただけでした。環境を変えたところで、ワタシはワタシのまま。そんな簡単なことにすら気付けませんでした。

情けなさに、悔しさに、涙が止まりません。こぼれ落ちた涙が吐瀉物と混ざり合います。

「……君、大丈夫？」

突然、背後から声がしました。足音には全く気付きませんでした。

「……だ、大丈夫……じゃないです」

顔が見えないまま、震える身体から声を絞り出して答えます。

「君、転校生だよね」

力なくこくりと頷きます。

「確か帰国子女だって……あーそっか。和式トイレの使い方、分かんなかったんだね。仕方ないよ。大丈夫、私に全部任せて」

その言葉を聞いて、堰を切ったように感情が溢れてきました。

「う、うわあぁぁぁん!!」

顔も知らない同級生の胸に抱きつき、大声を上げて泣いてしまいました。ブレザーの胸

部にワタシの吐瀉物が付いても、カノジョは嫌がる素振りを見せずそっとワタシを抱きしめてくれました。
「安心して。大丈夫。大丈夫」
体力も精神力も尽きた私は、柔らかなカノジョの胸の中で意識を失っていきました。

＊　＊　＊

洗濯機がぐわぁん、ぐわぁん、と回っている音を聞いていると、なんだか落ち着きます。音に合わせて、ゆったりとした時の流れに合わせて、自然と身体がゆらゆら揺れていました。
「あ、起きた？」
さっきのカノジョに顔を覗き込まれます。顔が近すぎて焦ってしまいます。
どうやらワタシはカノジョにあの窮地を助けてもらい、汚した服の洗濯までしてもらっているみたいです。
身体中にまとわりついていた汚物はサッパリ綺麗に無くなり、ラフなスウェットに着替

13

見られてしまったおもらし

えさせてもらっていました。ワタシ以外の匂いがしてなんだか落ち着きません。

「勝手に連れ込んで色々しちゃってごめんね。楽になったらお茶しようよ」

そう言ってカノジョは部屋の真ん中に置かれた小さな正方形の机の傍に座りました。

辺りを見回します。ワンルームと思わしき部屋は一面ゴミまみれです。カップ麺の容器や空のペットボトルなどが至る所に散らばっています。

のそのそと布団から這い出します。足元のゴミを踏まないよう慎重に歩き、机の前に座りました。カノジョの正面にしか座れるスペースがありませんでした。

上半身は裸にワイシャツ、そして下半身はショーツのみという無防備な姿でした。

何故か部屋の中なのに帽子を被っています。紺色のマリンキャップがカノジョの左目を隠しており、ミステリアスな雰囲気を醸し出しています。

「私は 漸来直美(ささらいなおみ)。君と同じクラスだよ。よろしくね。君は確か、壱ノ宮(いちのみや)……」

「照葉(てるは)です」

「可愛い名前だね。私は好きだな。照葉(てるは)って呼んでいい？」

今までブスだの幽霊だの言われてきたワタシは、生まれて初めて言われた言葉に驚きを隠せません。

14
見られてしまったおもらし

「そ、そそそ、そんな……！　かわいいだなんて……」
「名前だけじゃない。そのウェーブがかかった金色の髪も、とっても素敵だよ。……ってこれじゃあナンパしてるみたいだ」
「やめてください！　そんなわけないじゃないですか！　からかわないでください！」
「ごめん、そんなつもりじゃ……」
言いすぎちゃいました。ワタシっていつもこう。他人との距離感が掴めず、近づきすぎるか拒絶して閉じこもってしまうか。こんなだからワタシの周りから誰もいなくなってしまうのです。
「こちらこそ、ごめんなさい……」
気まずい沈黙が流れます。ワタシのせいです。
「そうだ、今日のことなんだけど……あ、思い出したくなかったら言ってね」
「ううん、大丈夫です……」
漸来（ささらい）さんが紙コップにコーラを注ぎます。どうぞ、とワタシに差し出しました。漸来（ささらい）さんは別のコップにもう一杯注いで一気飲みしていました。
「照葉（てるは）が気を失ってから保健室に連れていこうと思ったけど、保健室に行くまで人通り

見られてしまったおもらし

の多い廊下を通らなきゃいけないからさ。あんまり見られたくないでしょ？　管理棟の裏にフェンスが破れている所があって、そこから照葉(てるは)を背負って抜け出してきたんだ」

吐瀉物と排泄物に塗れたワタシを背負って……すごい迷惑を掛けてしまったようです。

「ワタシ汚かったですよね、ごめんなさい……」

「ううん、大丈夫。気にしないよ。それでさ、私の住んでるアパート、学校のすぐ側なんだ。だから照葉(てるは)を連れ込んで、シャワーとか着替えをさせてもらった。勝手に裸にしちゃってごめんね」

「謝らないで。ワタシのためにそこまでしてくれて、あ、あ……」

「……？」

ありがとう。その一言が言えない弱虫なワタシのせいで、漸来(ささらい)さんを困らせてしまいました。

「まぁ、ブレザーとかスカート、洗濯してるからさ。終わるまでゆっくりしていってよ」

そう言って漸来(ささらい)さんは机から離れました。

トモダチの家に遊びに行く経験の無かったワタシには、こういうとき何をして過ごせばいいかわかりません。

16

見られてしまったおもらし

ワタシのスマホは……ありました、机の上です。

スマホが手に入ったところでやることは何もありません。一ミリも動かない待ち受け画面をただただ見つめるだけです。

漸来(ささらい)さんはというと、部屋の隅にあるディスプレイの置かれたデスクでタブレットと戯れていました。

暇を持て余したワタシは改めて部屋を見渡します。二つある机の周り以外は足の踏み場がありません。

コーラのペットボトルとエナジードリンクの空き缶が至る所に散らばっています。その中に、よく見たらビールやチューハイの缶が混じっています。誰かが飲みに来るのでしょうか、それとも……いえ、疑うなんて失礼ですね。

普段自炊はしないのでしょうか、シンクにはカップ麺やコンビニ弁当の容器が積み上がっていて、食器や調理器具は全然見当たりません。

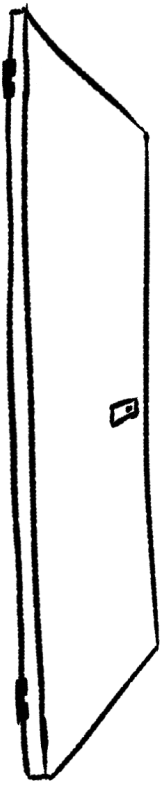
窓際には、大きなカゴに入り切らなかった服がたんまりと溢れています。チラリと見えた下着から目を逸らします。

「漸来(ささらい)さんって、一人暮らしなんですか？」

見られてしまったおもらし

「そうだよ。高校入ってからずっと」
「自炊とかは……してなさそうですね」
「めんどくさくてね。洗濯もめんどくさくて全自動の洗濯機買ったんだ。高かったけどね、凄いよ、最近の洗濯機は。洗濯物干さなくて良くなったもん」
どうやら極度のめんどくさがりのようです。
「漸来さんっ」
「ん、どうした？」
「今日のお礼に、この部屋片付けさせてください！　というかご飯も作らせてください！　こんな食生活続けてたら、漸来さん倒れちゃいます！」
漸来さんの健康に強い不安を感じたワタシは、思い切った提案をしてみました。どうせ距離を縮めるなら一気に攻めてみます。
「えっ、いいってそこまでしてくれなくても。気持ちだけ貰っとくから」
「ワタシがしたいんです！　本当に、漸来さんに助けてもらって、本当に……誰かにワタシを見てもらえることが、ワタシのために何かしてくれることが。それに――」
――こんなワタシを受け入れてくれたことが、何より嬉しくて。

「……それに？」
「……いや、なんでも。とにかく、この部屋はダメです！　ニンゲンの住む場所じゃないですよ！」
あと、汚すぎてこのままじゃワタシの精神が持ちません。
「照葉（てるは）、厳しいなぁ……この部屋に住んでる私、人間じゃなかったのか」
「いっ、いやそこまでは……」
「はは っ、冗談だよ。でも、照葉（てるは）も自分の家のことだってあるし」
「ワタシも一人暮らしなんです。だから大丈夫です」
「そこまで言ってくれるんなら、お願いしようかな。あぁ、現役JKの美少女メイド通い妻なんて、まさに夢のようだなぁ～！」
「言い方がいかがわしいですよ～！」
こうしてワタシたちの不思議な関係が始まりました。
ワタシは期待に満ち溢れていました。転校先でできた人生で初めてのトモダチとの生活に。そして、ようやく一歩を踏み出すことができたワタシのこれからに。



ソノ1　見られてしまったおもらし

5

見られてしまったおもらし

「……は、初めまして。い、壱ノ宮（いちのみや）、照葉（てるは）といいます。カリフォルニアから引っ越して来ました。よ、よろしくお願いします……」

九月に今更やってきた転校生に関心が無いのでしょうか、早くホームルームが終われと言わんばかりのまばらで控えめな拍手が聞こえてきます。

最初はワタシの下に群がってきたクラスメイトの方々も、ワタシが上手くコミュニケーションが取れないニンゲンだと判るとすぐに興味を失っていきました。

休み時間の度にワタシを囲う輪が小さくなり、昼休みを迎えた頃には既にワタシは一人になっていました。自販機で買ったパックのコーヒー風飲料が、やけに冷たく感じます。

ワタシは両親の反対を押し切り、単身で日本に帰国しました。臆病で引っ込み思案なワタシを変えるためにです。だからなんとしてでもワタシの居場所を作らなきゃいけないのです。そう思って隣のコに話しかけてみようとは思うのですが、最初の一歩が踏み出せません。

もたもたしているうちに、五時間目が始まってしまいました。英語の授業は問題文の日本語を理解するのが最も難しいと噂に聞きますが、インターナショナルスクールで覚えた拙い日本語でついていけるでしょうか。

授業が始まってから十分が経った頃、ワタシは腹部に違和感を覚えました。ごろごろ

……とお腹がせわしなく動いています。緊張のせいでしょうか。それともさっきの飲み物でお腹が冷えたのでしょう

か。どちらでもいいことです。ワタシはただ早くこの時間が過ぎ去ることを願いました。

二十分が経ちました。締め付けるような猛烈な痛みがワタシを襲います。

ギュルルル……

お腹が悲鳴を上げています。苦しい。出したい。

でも、ワタシは手を挙げて排泄の宣言をすることができません。周りの目が気になるのです。高校生にもなって我慢できないんだ。恥ずかしい。汚らわしい。そう見られると思うと怖くて仕方がないのです。

いや、最もそういう目でワタシを見ているのがワタシ自身なのは明らかでしょう。

お腹を押さえていると次第に波は引いていったので、少し安心しました。

あと五分というところで二度目の波が訪れてしまいました。もうそこまで来ている、と不浄な穴の締め付けが教えてくれます。ワタシは脂汗を流しながら歯を食いしばって一秒に一度しか進まない時計の針を睨みつけました。

ゴポゴポ……

おならが出そうですが、ガスではない物体が共に現れるのは明白でした。手に爪をぐっと食い込ませると、多少は気が紛れました。しかし、それも気休めに過ぎず、徐々にガスが出口へと向かっていきます。

これ以上はおならを出さないと耐えられません。ゆっくりとお尻の穴を緩めていきます。慎重に、慎重に……

ブヂュッ!!

見られてしまったおもらし

（ひぃっ!!）

生暖かい粘液の感触に、全身がゾワッと震えます。名前を口にすることすら躊躇われる汚物が、ワタシの肌を汚している。その嫌悪感に鳥肌が立ちました。

授業の終わりを告げる鐘が鳴りました。ワタシは力が抜けないようゆっくりと慎重に立ち上がると、人の流れに合わせて平静を装い教室を後にしました。どこか遠い、見つからない所で。ワタシは初めて歩く学び舎を急ぎ足で彷徨いました。

階段を降り、渡り廊下を抜けました。荷物が置かれた教室に帰れる自信はありません。もう教室からかなり離れたところまで来ています。ワタシはスカートの上からお尻を押さえながら、目に入った「御手洗」の文字に吸い込まれていきました。

「きゃあっ!!　何これ!?」

ワタシを待ち受けていたのは絶望でした。

三つある個室のうち、二つは便器から足元のタイルまで汚れ切っていました。そのおぞましさにワタシは震えました。ワタシにはとてもじゃないが座ることはできませんでした。

誰かが失敗したのでしょうか？　いや、ここは学校のトイレです。定期的に掃除されるはずです。なぜ二つとも悲惨なことになっているんだろう……いや、今はそんなことを考えている場合ではありません。

見られてしまったおもらし

足踏みをしながら残る一つの個室を覗きます。そこには白くて細長い穴の開いた何かが横たわっていました。これが便器とでもいうのでしょうか？　未知なる物体を目の前にして、ワタシの脳内は混乱を極めていました。

この便器らしいモノが一番綺麗です。もうここでするしかありません。でも、どうやって？　出ちゃう！　分かんない！

肛門が熱く痺れます。ワタシの意思に反して勝手に開きはじめました。

（もう我慢できない！　ダメ!!　ああっ!!）

ブビィッ!!　ブリュリュリュリュリュ!!

ワタシはとうとう便器の前で力尽きてしまいた。

ムニュニュニュ!!　ムリムリムリッ!!

お尻が生暖かい感触に包まれて気持ち悪いです。

せめて便器の中に……と思うものの、目の前の穴が本当に便器なのかわかりません。仮に便器だとしても、使い方が見当もつきません。ワタシはただパンツの中に汚泥を垂れ流し続けることしかできませんでした。

ベチョッ!!

パンツに収まりきらなくなった不浄な泥がタイルに落ちました。パンツで濾された不潔な粘液がワタシの太ももや靴下、ローファーの中までを卑しく犯していきます。

ワタシは全身を覆う嫌悪感で急激な吐き気を催しました。

「うぉえっ!!」

たまらず目の前の白い穴に向かって胃の苦しみを吐き出します。

ビチャビチャッ!!

落下した吐瀉物が陶器に跳ね返り、辺りに散らばっていきます。靴下に斑点模様が増えていきます。

気持ち悪い。そう思って排泄すればするほど、口やお尻、脚に靴下、ローファーの中まで、身体中のあらゆる所が更に汚染されていきます。負のループに陥ったワタシは、独り寂れたトイレで茶色く染まっていくのでした。

＊　＊　＊

もうお腹には何も残っていません。全て出し尽くしたことで、吐き気も便意も収まっていました。

目に涙が溢れてきました。

何が「日本に来たら変われる」でしょう。ワタシは何も変わっちゃいません。

弱虫で、授業中に手を挙げる勇気が無い。高校生なのに、トイレまで我慢することができない。洋式トイレに屈んで便座に触れることなく排泄する、とか機転を利かせることもできない。

その結果がこの有様です。

見られてしまったおもらし

ジブンを変えるには踏み出すしかない。それは正しいのです。しかし、ワタシは踏み出したと思い込んでいただけでした。環境を変えたところで、ワタシはワタシのまま。そんな簡単なことにすら気付けませんでした。

情けなさに、悔しさに、涙が止まりません。こぼれ落ちた涙が吐瀉物と混ざり合います。

「……君、大丈夫？」

突然、背後から声がしました。足音には全く気付きませんでした。

「……だ、大丈夫……じゃないです」

顔が見えないまま、震える身体から声を絞り出して答えます。

「君、転校生だよね」

力なくこくりと頷きます。

「確か帰国子女だって……あーそっか。和式トイレの使い方、分かんなかったんだね。仕方ないよ。大丈夫、私に全部任せて」

その言葉を聞いて、堰を切ったように感情が溢れてきました。

「う、うわあぁぁぁん!!」

顔も知らない同級生の胸に抱きつき、大声を上げて泣いてしまいました。ブレザーの胸部にワタシの吐瀉物が付いても、カノジョは嫌がる素振りを見せずそっとワタシを抱きしめてくれました。

「安心して。大丈夫。大丈夫」
体力も精神力も尽きた私は、柔らかなカノジョの胸の中で意識を失っていきました。

＊　＊　＊

洗濯機がぐわぁん、ぐわぁん、と回っている音を聞いていると、なんだか落ち着きます。音に合わせて、ゆったりとした時の流れに合わせて、自然と身体がゆらゆら揺れていました。
「あ、起きた？」
さっきのカノジョに顔を覗き込まれます。顔が近すぎて焦ってしまいます。
どうやらワタシはカノジョにあの窮地を助けてもらい、汚した服の洗濯までしてもらっているみたいです。
身体中にまとわりついていた汚物はサッパリ綺麗に無くなり、ラフなスウェットに着替えさせてもらっていました。
ワタシ以外の匂いがしてなんだか落ち着きません。
「勝手に連れ込んで色々しちゃってごめんね。楽になったらお茶しようよ」
そう言ってカノジョは部屋の真ん中に置かれた小さな正方形の机の傍に座りました。
辺りを見回します。ワンルームと思わしき部屋は一面ゴミまみれです。カップ麺の容器や空のペットボトルなどが至

る所に散らばっています。
のそのそと布団から這い出します。足元のゴミを踏まないよう慎重に歩き、机の前に座りました。カノジョの正面にしか座れるスペースがありませんでした。
上半身は裸にワイシャツ、そして下半身はショーツのみという無防備な姿でした。
何故か部屋の中なのに帽子を被っています。紺色のマリンキャップがカノジョの左目を隠しており、ミステリアスな雰囲気を醸し出しています。
「私は 漸来直美(さざらいなおみ)。君と同じクラスだよ。よろしくね。君は確か、壱ノ宮(いちのみや)……」
「照葉(てるは)です」
「可愛い名前だね。私は好きだな。照葉(てるは)って呼んでいい？」
今までブスだの幽霊だの言われてきたワタシは、生まれて初めて言われた言葉に驚きを隠せません。
「そ、そそそ、そんな……！　かわいいだなんて……」
「名前だけじゃない。そのウェーブがかかった金色の髪も、とっても素敵だよ。……ってこれじゃあナンパしてるみたいだ」
「やめてください！　そんなわけないじゃないですか！　からかわないでください！」
「ごめん、そんなつもりじゃ……」

言いすぎちゃいました。ワタシっていつもこう。他人との距離感が掴めず、近づきすぎるか拒絶して閉じこもってしまうか。こんなだからワタシの周りから誰もいなくなってしまうのです。

「こちらこそ、ごめんなさい……」

気まずい沈黙が流れます。ワタシのせいです。

「そうだ、今日のことなんだけど……あ、思い出したくなかったら言ってね」

「ううん、大丈夫です……」

漸来(ざざらい)さんが紙コップにコーラを注ぎます。どうぞ、とワタシに差し出しました。漸来(ざざらい)さんは別のコップにもう一杯注いで一気飲みしていました。

「照葉(てるは)が気を失ってから保健室に連れていこうと思ったけど、保健室に行くまで人通りの多い廊下を通らなきゃいけないからさ。あんまり見られたくないでしょ？　管理棟の裏にフェンスが破れている所があって、そこから照葉(てるは)を背負って抜け出してきたんだ」

吐瀉物と排泄物に塗れたワタシを背負って……すごい迷惑を掛けてしまったようです。

「ワタシ汚かったですよね、ごめんなさい……」

「ううん、大丈夫。気にしないよ。それでさ、私の住んでるアパート、学校のすぐ側なんだ。だから照葉(てるは)を連れ込んで、シャワーとか着替えをさせてもらった。勝手に裸にしちゃってごめんね」

見られてしまったおもらし

「謝らないで。ワタシのためにそこまでしてくれて、あ、あ……」

「……？」

ありがとう。その一言が言えない弱虫なワタシのせいで、漸来さんを困らせてしまいました。

「まぁ、ブレザーとかスカート、洗濯してるからさ。終わるまでゆっくりしていってよ」

そう言って漸来さんは机から離れました。

トモダチの家に遊びに行く経験の無かったワタシには、こういうとき何をして過ごせばいいかわかりません。

ワタシのスマホは……ありました、机の上です。

スマホが手に入ったところでやることは何もありません。一ミリも動かない待ち受け画面をただただ見つめるだけです。

漸来さんはというと、部屋の隅にあるディスプレイの置かれたデスクでタブレットと戯れていました。

暇を持て余したワタシは改めて部屋を見渡します。二つある机の周り以外は足の踏み場がありません。

コーラのペットボトルとエナジードリンクの空き缶が至る所に散らばっています。その中に、よく見たらビールやチューハイの缶が混じっています。誰かが飲みに来るのでしょうか、それとも……いえ、疑うなんて失礼ですね。

普段自炊はしないのでしょうか、シンクにはカップ麺やコンビニ弁当の容器が積み上がっていて、食器や調理器具は全然見当たりません。

窓際には、大きなカゴに入り切らなかった服がたんまりと溢れています。チラリと見えた下着から目を逸らします。

「漸来さんって、一人暮らしなんですか？」
「そうだよ。高校入ってからずっと」
「自炊とかは……してなさそうですね」
「めんどくさくてね。洗濯もめんどくさくて全自動の洗濯機買ったんだ。高かったけどね、凄いよ、最近の洗濯機は。洗濯物干さなくて良くなったもん」
どうやら極度のめんどくさがりのようです。
「漸来さんっ」
「ん、どうした？」
「今日のお礼に、この部屋片付けさせてください！　というかご飯も作らせてください！　こんな食生活続けてたら、漸来さん倒れちゃいます！」
漸来さんの健康に強い不安を感じたワタシは、思い切った提案をしてみました。どうせ距離を縮めるなら一気に攻めてみます。
「えっ、いいってそこまでしてくれなくても。気持ちだけ貰っとくから」
「ワタシがしたいんです！　本当に、漸来さんに助けてもらって、本当に……誰かにワタシを見てもらえることが、ワタシのために何かしてくれることが。それに――」

――こんなワタシを受け入れてくれたことが、何より嬉しくて。
「……それに？」
「……いや、なんでも。とにかく、この部屋はダメです！　ニンゲンの住む場所じゃないですよ！」
あと、汚すぎてこのままじゃワタシの精神が持ちません。
「照葉（てるは）、厳しいなぁ……この部屋に住んでる私、人間じゃなかったのか」
「いっ、いやそこまでは……」
「ははっ、冗談だよ。でも、照葉（てるは）も自分の家のことだってあるし」
「ワタシも一人暮らしなんです。だから大丈夫です」
「そこまで言ってくれるんなら、お願いしようかな。あぁ、現役JKの美少女メイド通い妻なんて、まさに夢のようだなぁ～！」
「言い方がいかがわしいですよ～！」
こうしてワタシたちの不思議な関係が始まりました。
ワタシは期待に満ち溢れていました。転校先でできた人生で初めてのトモダチとの生活に。そして、ようやく一歩を踏み出すことができたワタシのこれからに。

ソノ1　見られてしまったおもらし

5

見られてしまったおもらし

「……は、初めまして。い、壱ノ宮(いちのみや)、照葉(てるは)といいます。カリフォルニアから引っ越して来ました。よ、よろしくお願いします……」

九月に今更やってきた転校生に関心が無いのでしょうか、早くホームルームが終われと言わんばかりのまばらで控えめな拍手が聞こえてきます。

最初はワタシの下に群がってきたクラスメイトの方々も、ワタシが上手くコミュニケーションが取れないニンゲンだと判るとすぐに興味を失っていきました。

休み時間の度にワタシを囲う輪が小さくなり、昼休みを迎えた頃には既にワタシは一人になっていました。自販機で買ったパックのコーヒー風飲料が、やけに冷たく感じます。

ワタシは両親の反対を押し切り、単身で日本に帰国しました。臆病で引っ込み思案なワタシを変えるためにです。だからなんとしてでもワタシの居場所を作らなきゃいけないのです。そう思って隣のコに話しかけてみようとは思うのですが、最初の一歩が踏み出せません。

もたもたしているうちに、五時間目が始まってしまいました。英語の授業は問題文の日本語を理解するのが最も難しいと噂に聞きますが、インターナショナルスクールで覚えた拙い日本語でついていけるでしょうか。

授業が始まってから十分が経った頃、ワタシは腹部に違和感を覚えました。ごろごろ

……とお腹がせわしなく動いています。緊張のせいでしょうか。それともさっきの飲み物でお腹が冷えたのでしょう

6

見られてしまったおもらし

か。どちらでもいいことです。ワタシはただ早くこの時間が過ぎ去ることを願いました。

二十分が経ちました。締め付けるような猛烈な痛みがワタシを襲います。

ギュルルル……

お腹が悲鳴を上げています。苦しい。出したい。

でも、ワタシは手を挙げて排泄の宣言をすることができません。周りの目が気になるのです。高校生にもなって我慢できないんだ。恥ずかしい。汚らわしい。そう見られると思うと怖くて仕方がないのです。

いや、最もそういう目でワタシを見ているのがワタシ自身なのは明らかでしょう。

お腹を押さえていると次第に波は引いていったので、少し安心しました。

あと五分というところで二度目の波が訪れてしまいました。もうそこまで来ている、と不浄な穴の締め付けが教えてくれます。ワタシは脂汗を流しながら歯を食いしばって一秒に一度しか進まない時計の針を睨みつけました。

ゴポゴポ……

おならが出そうですが、ガスではない物体が共に現れるのは明白でした。手に爪をぐっと食い込ませると、多少は気が紛れました。しかし、それも気休めに過ぎず、徐々にガスが出口へと向かっていきます。

これ以上はおならを出さないと耐えられません。ゆっくりとお尻の穴を緩めていきます。慎重に、慎重に……

ブヂュッ!!

7

見られてしまったおもらし

（ひぃっ!!）

生暖かい粘液の感触に、全身がゾワッと震えます。名前を口にすることすら躊躇われる汚物が、ワタシの肌を汚している。その嫌悪感に鳥肌が立ちました。

授業の終わりを告げる鐘が鳴りました。ワタシは力が抜けないようゆっくりと慎重に立ち上がると、人の流れに合わせて平静を装い教室を後にしました。どこか遠い、見つからない所で。ワタシは初めて歩く学び舎を急ぎ足で彷徨いました。

階段を降り、渡り廊下を抜けました。荷物が置かれた教室に帰れる自信はありません。もう教室からかなり離れたところまで来ています。ワタシはスカートの上からお尻を押さえながら、目に入った「御手洗」の文字に吸い込まれていきました。

「きゃあっ!!　何これ!?」

ワタシを待ち受けていたのは絶望でした。

三つある個室のうち、二つは便器から足元のタイルまで汚れ切っていました。そのおぞましさにワタシは震えました。ワタシにはとてもじゃないが座ることはできませんでした。

誰かが失敗したのでしょうか？　いや、ここは学校のトイレです。定期的に掃除されるはずです。なぜ二つとも悲惨なことになっているんだろう……いや、今はそんなことを考えている場合ではありません。

8

見られてしまったおもらし

足踏みをしながら残る一つの個室を覗きます。そこには白くて細長い穴の開いた何かが横たわっていました。これが便器とでもいうのでしょうか？　未知なる物体を目の前にして、ワタシの脳内は混乱を極めていました。

この便器らしいモノが一番綺麗です。もうここでするしかありません。でも、どうやって？　出ちゃう！　分かんない！

肛門が熱く痺れます。ワタシの意思に反して勝手に開きはじめました。

（もう我慢できない！　ダメ!!　ああっ!!）

ブビィッ!!　ブリュリュリュリュリュ!!

ワタシはとうとう便器の前で力尽きてしまいた。

ムニュニュニュ!!　ムリムリムリッ!!

お尻が生暖かい感触に包まれて気持ち悪いです。

せめて便器の中に……と思うものの、目の前の穴が本当に便器なのかわかりません。仮に便器だとしても、使い方が見当もつきません。ワタシはただパンツの中に汚泥を垂れ流し続けることしかできませんでした。

ベチョッ!!

パンツに収まりきらなくなった不浄な泥がタイルに落ちました。パンツで濾された不潔な粘液がワタシの太ももや靴下、ローファーの中までを卑しく犯していきます。

ワタシは全身を覆う嫌悪感で急激な吐き気を催しました。

「うぉえっ!!」

たまらず目の前の白い穴に向かって胃の苦しみを吐き出します。

ビチャビチャッ!!

落下した吐瀉物が陶器に跳ね返り、辺りに散らばっていきます。靴下に斑点模様が増えていきます。

気持ち悪い。そう思って排泄すればするほど、口やお尻、脚に靴下、ローファーの中まで、身体中のあらゆる所が更に汚染されていきます。負のループに陥ったワタシは、独り寂れたトイレで茶色く染まっていくのでした。

＊　＊　＊

もうお腹には何も残っていません。全て出し尽くしたことで、吐き気も便意も収まっていました。

目に涙が溢れてきました。

何が「日本に来たら変われる」でしょう。ワタシは何も変わっちゃいません。

弱虫で、授業中に手を挙げる勇気が無い。高校生なのに、トイレまで我慢することができない。洋式トイレに屈んで便座に触れることなく排泄する、とか機転を利かせることもできない。

その結果がこの有様です。

見られてしまったおもらし

ジブンを変えるには踏み出すしかない。それは正しいのです。しかし、ワタシは踏み出したと思い込んでいただけでした。環境を変えたところで、ワタシはワタシのまま。そんな簡単なことにすら気付けませんでした。

情けなさに、悔しさに、涙が止まりません。こぼれ落ちた涙が吐瀉物と混ざり合います。

「……君、大丈夫？」

突然、背後から声がしました。足音には全く気付きませんでした。

「……だ、大丈夫……じゃないです」

顔が見えないまま、震える身体から声を絞り出して答えます。

「君、転校生だよね」

力なくこくりと頷きます。

「確か帰国子女だって……あーそっか。和式トイレの使い方、分かんなかったんだね。仕方ないよ。大丈夫、私に全部任せて」

その言葉を聞いて、堰を切ったように感情が溢れてきました。

「う、うわあぁぁぁん!!」

顔も知らない同級生の胸に抱きつき、大声を上げて泣いてしまいました。ブレザーの胸部にワタシの吐瀉物が付いても、カノジョは嫌がる素振りを見せずそっとワタシを抱きしめてくれました。

「安心して。大丈夫。大丈夫」
体力も精神力も尽きた私は、柔らかなカノジョの胸の中で意識を失っていきました。

＊　＊　＊

洗濯機がぐわぁん、ぐわぁん、と回っている音を聞いていると、なんだか落ち着きます。音に合わせて、ゆったりとした時の流れに合わせて、自然と身体がゆらゆら揺れていました。
「あ、起きた？」
さっきのカノジョに顔を覗き込まれます。顔が近すぎて焦ってしまいます。
どうやらワタシはカノジョにあの窮地を助けてもらい、汚した服の洗濯までしてもらっているみたいです。
身体中にまとわりついていた汚物はサッパリ綺麗に無くなり、ラフなスウェットに着替えさせてもらっていました。
ワタシ以外の匂いがしてなんだか落ち着きません。
「勝手に連れ込んで色々しちゃってごめんね。楽になったらお茶しようよ」
そう言ってカノジョは部屋の真ん中に置かれた小さな正方形の机の傍に座りました。
辺りを見回します。ワンルームと思わしき部屋は一面ゴミまみれです。カップ麺の容器や空のペットボトルなどが至

見られてしまったおもらし

る所に散らばっています。

のそのそと布団から這い出します。足元のゴミを踏まないよう慎重に歩き、机の前に座りました。カノジョの正面にしか座れるスペースがありませんでした。

上半身は裸にワイシャツ、そして下半身はショーツのみという無防備な姿でした。

何故か部屋の中なのに帽子を被っています。紺色のマリンキャップがカノジョの左目を隠しており、ミステリアスな雰囲気を醸し出しています。

「私は瀬来直美。君と同じクラスだよ。よろしくね。君は確か、壱ノ宮……」

「照葉です」

「可愛い名前だね。私は好きだな。照葉って呼んでいい？」

今までブスだの幽霊だの言われてきたワタシは、生まれて初めて言われた言葉に驚きを隠せません。

「そ、そそそ、そんな……！　かわいいだなんて……」

「名前だけじゃない。そのウェーブがかかった金色の髪も、とっても素敵だよ。……ってこれじゃあナンパしてるみたいだ」

「やめてください！　そんなわけないじゃないですか！　からかわないでください！」

「ごめん、そんなつもりじゃ……」

見られてしまったおもらし

言いすぎちゃいました。ワタシっていつもこう。他人との距離感が掴めず、近づきすぎるか拒絶して閉じこもってしまうか。こんなだからワタシの周りから誰もいなくなってしまうのです。

「こちらこそ、ごめんなさい……」

気まずい沈黙が流れます。ワタシのせいです。

「そうだ、今日のことなんだけど……あ、思い出したくなかったら言ってね」

「ううん、大丈夫です……」

漸来さんが紙コップにコーラを注ぎます。どうぞ、とワタシに差し出しました。漸来さんは別のコップにもう一杯注いで一気飲みしていました。

「照葉が気を失ってから保健室に連れていこうと思ったけど、保健室に行くまで人通りの多い廊下を通らなきゃいけないからさ。あんまり見られたくないでしょ？　管理棟の裏にフェンスが破れている所があって、そこから照葉を背負って抜け出してきたんだ」

吐瀉物と排泄物に塗れたワタシを背負って……すごい迷惑を掛けてしまったようです。

「ワタシ汚かったですよね、ごめんなさい……」

「ううん、大丈夫。気にしないよ。それでさ、私の住んでるアパート、学校のすぐ側なんだ。だから照葉を連れ込んで、シャワーとか着替えをさせてもらった。勝手に裸にしちゃってごめんね」

見られてしまったおもらし

「謝らないで。ワタシのためにそこまでしてくれて、あ、あ……」

「……？」

ありがとう。その一言が言えない弱虫なワタシのせいで、漸来さんを困らせてしまいました。

「まぁ、ブレザーとかスカート、洗濯してるからさ。終わるまでゆっくりしていってよ」

そう言って漸来さんは机から離れました。

トモダチの家に遊びに行く経験の無かったワタシには、こういうとき何をして過ごせばいいかわかりません。

ワタシのスマホは……ありました、机の上です。

スマホが手に入ったところでやることは何もありません。一ミリも動かない待ち受け画面をただただ見つめるだけです。

漸来さんはというと、部屋の隅にあるディスプレイの置かれたデスクでタブレットと戯れていました。

暇を持て余したワタシは改めて部屋を見渡します。二つある机の周り以外は足の踏み場がありません。

コーラのペットボトルとエナジードリンクの空き缶が至る所に散らばっています。その中に、よく見たらビールやチューハイの缶が混じっています。誰かが飲みに来るのでしょうか、それとも……いえ、疑うなんて失礼ですね。

普段自炊はしないのでしょうか、シンクにはカップ麺やコンビニ弁当の容器が積み上がっていて、食器や調理器具は全然見当たりません。

窓際には、大きなカゴに入り切らなかった服がたんまりと溢れています。チラリと見えた下着から目を逸らします。

見られてしまったおもらし

「漸来さんって、一人暮らしなんですか？」
「そうだよ。高校入ってからずっと」
「自炊とかは……してなさそうですね」
「めんどくさくてね。洗濯もめんどくさくて全自動の洗濯機買ったんだ。高かったけどね、凄いよ、最近の洗濯機は。洗濯物干さなくて良くなったもん」
どうやら極度のめんどくさがりのようです。
「漸来さんっ」
「ん、どうした？」
「今日のお礼に、この部屋片付けさせてください！　というかご飯も作らせてください！　こんな食生活続けてたら、漸来さん倒れちゃいます！」
漸来さんの健康に強い不安を感じたワタシは、思い切った提案をしてみました。どうせ距離を縮めるなら一気に攻めてみます。
「えっ、いいってそこまでしてくれなくても。気持ちだけ貰っとくから」
「ワタシがしたいんです！　本当に、漸来さんに助けてもらって、本当に……誰かにワタシを見てもらえることが、ワタシのために何かしてくれることが。それに――」

――こんなワタシを受け入れてくれたことが、何より嬉しくて。

「……それに？」

「……いや、なんでも。とにかく、この部屋はダメです！　ニンゲンの住む場所じゃないですよ！」

あと、汚すぎてこのままじゃワタシの精神が持ちません。

「照葉（てるは）、厳しいなぁ……この部屋に住んでる私、人間じゃなかったのか」

「いっ、いやそこまでは……」

「ははっ、冗談だよ。でも、照葉（てるは）も自分の家のことだってあるし」

「ワタシも一人暮らしなんです。だから大丈夫です」

「そこまで言ってくれるんなら、お願いしようかな。あぁ、現役JKの美少女メイド通い妻なんて、まさに夢のようだなぁ～！」

「言い方がいかがわしいですよ～！」

こうしてワタシたちの不思議な関係が始まりました。

ワタシは期待に満ち溢れていました。転校先でできた人生で初めてのトモダチとの生活に。そして、ようやく一歩を踏み出すことができたワタシのこれからに。